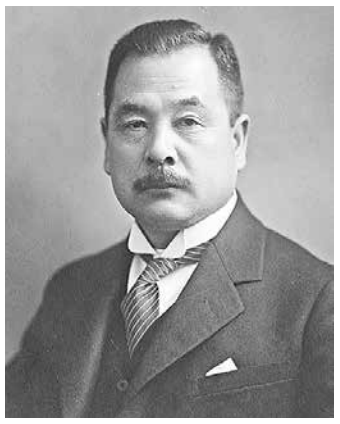


山梨県は日本の近代化に大きく貢献した偉人を数多く輩出している。自主性、公共性、開拓精神という甲州人の気風に基づいた先人たちの挑戦と功績を紹介する。

甲州財閥
早川徳次（のりつぐ）（1881―1942）


（個人蔵）

地下鉄誕生は一人の志から

未来を拓いた開拓精神

切符売りも経験

今や首都圏の移動に欠かせないインフラとなっている地下鉄。その礎を築き、「地下鉄の父」と称される実業家・早川徳次は、1881（明治14）年、東八代郡御代咲（みよさき）村（現笛吹市一宮町）の元村長・常富とえひの6人きょうだいの末っ子として生まれた。県立甲府中学（現甲府一高）を卒業後、第六高等学校（現岡山大）に入学するも病気を理由に中退。完治すると、早稲田大法科で勉学に励んだ。

この頃から南満州鉄道の初代総裁・後藤新平に師事し、大学卒業後に同社に入社。後藤が鉄道院総裁に就任すると早川も後を追って同院に入局し、現場を知りたいと後藤に頼み込んで切符売りなどの仕事を経験した。こうした姿に才気を見出した甲州財閥で「鉄道王」と呼ばれた根津嘉一郎に請われ、1911（明治44）年に佐野鉄道（現東武鉄道佐野線の一部）を立て直し、翌年には高野登山鉄道（現南海電気鉄道高野線）の支配人に抜擢（ばってき）され、再建に導いた。2人のもとで鉄道経営の腕を磨いた早川は、1914（大正3）年に鉄道調査の目的で、海外視察へ旅立った。

調査重ね会社設立

イギリス・ロンドンを訪れた早川は、市内を網の目のように走る世界初の地下鉄に大きな衝撃を受けた。市民の足として重宝されている様子を見て、都市交通の未来は地下鉄にあると確信。その後もフランスやアメリカなど世界の主要な地下鉄の調査研究を行い、1916（大正5）年、東京での地下鉄構想を胸に秘め、帰国した。


早川の地下鉄構想に大きな打撃を与えた関東大事震災が発生した際に記した備忘録には「本社ガ第一期線トシテ敷設セントスル新橋銀座上野浅草等一切焼土ト化シタリ」と記されている（個人蔵）


東京地下鉄道の起工式で杭打機に手をかける早川（個人蔵）

早川は早速地下鉄建設に動き出したが数々の困難が待ち受けていた。軟弱といわれた東京の地盤に関する懸念を払拭するため、地質調査や湧水量の調査を徹底的に行ったほか、自ら街角に立ち交通量を調査するなど事業の有効性と安全性を証明。政財界の渋沢栄一らを説得し、1920（大正9）年に東京地下鉄道株式会社（現東京メトロ）設立にこぎつけた。

7年かけて全線開通

設立後も、1923（大正12）年の関東大震災により外資の融資話が白紙になるなど資金不足、難工事を乗り越え、1927（昭和2）年12月30日、東洋初の地下鉄を浅草～上野間（約2・2キロ）、現在の銀座線）で開通させた。日本初の自動改札や自動列車停止装置を備えた電車には、初日に約10万人が詰めかけた。さらに早川は、甲州財閥で阪急電鉄の創業者・小林一三のターミナルデパートを参考に、主要駅に「地下鉄ストア」を開業。100円ショップの先駆けとなる10銭均一を導入し、集客に成功した。

地下鉄は1934（昭和9）年6月に新橋まで延伸。早川が当初構想していた浅草～新橋間（約8キロ）の全線が完成した。1940（昭和15）年、帝都高速度交通営団への吸収が決まり、早川は心血を注いだ地下鉄の経営を59歳で退いた。

私塾「青年道場」

社長退任後、故郷・山梨に戻った早川は、地元の青年たちに高度な教育と人間形成の場を提供する私塾「青年道場」を構想するようになる。甲府中学の後輩で後に東京タワーの設計を手掛けた内藤多仲らに設計を依頼し、自宅隣地への建設を計画していたが、着工目前の1942（昭和17）年に61歳で志半ば急逝した。青年道場は実現しなかったが、自宅「早川家住宅母屋」は数奇屋風意匠の質が高く、部分的に洋風意匠を取り入れた近代和風住宅の好例として現在、国の有形文化財に登録されている。


国の登録有形文化財「早川家住宅母屋」。早川は隣地に私塾「青年道場」の建設を構想していた

偉人の言葉

凡（おおよ）そ如何（いか）なる世にも、仕事をするにも、大切なるものは人である

広告のお問い合わせは　山梨新報社まで☎055（237）8121